

立ち上がった1集落の活動計5集落の5つの活動を観察し、そのうち4つの活動を運営する中心メンバーである住民への、自由回答形式のグループ面接を行った。

(1) 茨の会（国直集落）

（写真1～4参照）

①集落の概況

国直集落は大和村の入り口に位置し、集落の中心は、湾を取り囲むように国直海岸沿いに広がる。人口121人、世帯数は59世帯（以下、すべて平成26年2月末日現在）。高齢化率は約19%と他の集落より低い。Iターン者などが集落のつながりに入りづらい、趣味活動が少なく、老人クラブの他に集いの場がないため、介護の公的サービスへの依存が加速している。

②活動の概要

毎週土曜日14時から、集落から坂を上った県道脇の集会所で活動を行っている。支え合いの活動の重要性を認識している人たちが中心となり、支え合い活動が開始された。もとはガソリンスタンドであった平屋の建物を修理し、活動の拠点とした。主な活動は、手工芸を生業とする人が中心メンバーにいたことから、手芸品製作・販売（ブランド名『赤とんぼ』）から始まった。その後、集落の人の協力を得て、休耕地を共同農地に整備し、島らっきょうの他ピーナッツを栽培し始めたほか、苗を各農家に配布し、栽培を依頼し、加工・販売している。集会所脇の小さな土地も開墾し、島らっきょうを植えている。これらの活動が、地域リハビリの場としても機能しており、退院した人が参加することでリハビリの効果が見られている。2か月に1回奄美中央病院（医療生協）が無料で健康チェックに

来て、健康講話、簡単な健康チェック（体重、血圧、骨密度、血管年齢、尿など）を行っている。

③観察記録

運営の中心メンバーは区長（各集落に1名選任されている集落の会長）の他計4名。この日の参加者は計15名。時間が近づくと参加者が続々と歩いてくる。ゆっくり歩いてこられた高齢の女性から、「数年前に夫を亡くして、息子が島を出てしまい気持ちが沈んで、2年くらい泣いてばかりいました。でも、ここの会の人たちが誘ってくれて、泣いてばかりいてはと思い参加するようになったんです。おかげで元気になって、今は1週間に1回楽しみ。他の人にも行こうよと声をかけています」と涙ぐみながら話される。集会所には畳の部屋があり、低い机を並べて輪になり、持ち寄ったお茶菓子（チーズケーキ）や惣菜（パパイアの漬物）、お茶を飲みながら、和やかな雰囲気で作業をしている。部屋の壁には、作成した支え合いマップや、活動に対する表彰状などが貼られている。本日の作業は、砂浜の小石を利用したお手玉の製作。おしゃべりしながら、せっせとお手玉をつくっていく。皆で話し合った結果、会での楽しみを増やすために、敷地内の自動販売機を撤去しネット回線を解約し、浮いたお金でカラオケセットを購入することになった。皆で喜んでいる。定例会中は、運営の中心メンバーが参加者に目配せをおこなっている。

自由回答形式のグループ面接で、運営・実施を行う住民から、次のような話が聞かれた。

「今後は、ピーナッツなどで集落ブランドの商品をつくりたいと考えている。農業し続けられることはお年寄りには励みになる

と思っている。」

「土いじりをする機会をつくり、部屋にもらえないようになった。以前は（集落内に）グループごとの派閥のようなものがあつたが、この会ができて、らっきょうをつくるなど共通の話題や目標ができて変わった。少しずつ交流が生まれていった」

「昔はテレビもなく道路も整備されておらず簡単にほかの集落と行き来できなかったもので、しょっちゅう集落民で集まっては島唄を歌ったり踊ったりしていた。助け合う『ユイ（結）』が当たり前だった。今も、何かあったら助け合う。莢の会については、まあ健康のためによいことを、収益として返ってきたら農作物を作り甲斐もあるし、いつまでも仕事ができるのはよいことだから、そういう目的の会もいいんじゃない？という感じだった。あまり活動に参加することに疑問を抱かなかつたし、その点はすんなりといった」

「『ユイ（結）』が基盤にあるから、なんとなく当たり前のような感じなのかもしれない（『ユイ（結）』ということばはこちらから出さなくても自然に出てきた）」

④活動の効果（ソーシャルキャピタルの醸成、強化に伴う地域の変化）

住民への自由回答形式のグループ面接の結果、次のような効果、地域の変化がみられていた。

- ・閉じこもりがちな高齢者が外出するようになった
- ・高齢者が手芸品製作や畑での農作物栽培などの活動を通して、地域で役割を担うようになり、意欲、生きがい、喜びを取り戻した
- ・人と人のつながりが生まれた（広がった）
- ・派閥などで少しくましくいなくなってい

た集落の人の関係に融和が生まれた

- ・作った野菜を人にあげることで集落の人の交流が生まれた
- ・青壮年と高齢者の交流が生まれるなど、世代間交流へと発展した

(2) 名音ティダの会（名音集落）

（写真 5～7 参照）

①集落の概況

名音集落の中心は山合いに広がっており、大和村のなかで 2 番目に人口が多い集落である。人口 209 人、世帯数 110 世帯。しかし高齢化率は約 30 %（大和村平均約 37.0 %）で、平成 23 年度中学校が別の集落に統合され、子どもの数が減少している。「行く場所がない、寂しい」という理由でデイサービスを利用する高齢者も少なくなく、公的サービスへの依存度が高い。

②活動の概要

毎週土曜日 14 時から、集落商店に隣接する倉庫を改造した集会所で、定例サロンを開催している。その他、毎週木曜日夜、集落の小学生を対象とする三味線教室、大人の島唄教室を開催している。集いの場、憩いの場がなかったことから、住民の意向で開催が決まった。主な活動は、サロン活動（喫茶、集いの場）の他、U ターン、I ターン者を含む男性チームによる無料もしくは有料の生活支援活動（散髪、草刈、剪定、畑作業の手伝い）、野菜（らっきょう、大根）、花の栽培・集荷・販売、桜の苗を集落内に植える活動など、活動内容は拡大している。2 ヶ月に 1 回奄美中央病院（医療生協）による健康チェックが行われている。

③観察記録

16 時 30 分に到着すると、早くから来ていた集落の住民が帰り、入れ替わったとこ

ろで、今までもっと賑わっていたという。運営の中心メンバーを含む 14 名に減っていた。この日は土曜日だったが、村長が見学に来たり、TV 局の取材が入ったりして慌ただしく、調度終わったところであった。時々村長は各集落の活動を見て回っているという。円卓、机、畳のスペースにそれぞれが集い、季節のお茶菓子や惣菜、お茶が机上にあふれ、残った人たちがそれぞれ賑やかに語らっていた。お茶菓子や惣菜は、U ターンの女性を含む 2 名が炊事場で調理し、振る舞っているほか、持ち寄りもあるといい、机上是食べきれない食材であふれている。費用は心づけとして 100 円を入れる竹筒が壁にぶら下がっている。また、部屋の壁には、立ち上げ時の写真や作成した支え合いマップ、活動の交流会やシンポジウム時の写真などが所せましと貼られている。75 歳以上の高齢女性 3 名と、小学生への三味線教室を開催している退職後の男性が、島唄を歌い始めた。祝いの席で歌う歌と恋歌 3 曲を披露してくれたところで、うち 2 名の女性が、「私らはもう夫がいない。ここができていく場所ができた」、「楽しい」、「行く場所ができた」など話してくれた。中心メンバーの一人は、「一人暮らしの高齢者が増えている。この女性たちも夫が他界し、一人暮らしだ」と話してくれた。定例サロンの閉会時間に近づいた頃、男性が裏手に集まってきて、裏口が次第にぎやかになってくる。今年初ものの琉球猪を仕留めたと、祝賀ムードになる。炭火焼きによる焼き肉会が始まり、大勢の集落民が集まって来て、お酒が入る。中にいる人たちにも、「食べろ、食べろ」と焼き肉が運ばれてくる。この場所は定例のサロン開催場としてだけではなく、何かあった時の寄合場に

なっているという。時々こうして何となく皆集まってくるようになったと、参加者が話してくれた。

自由回答形式のグループ面接で、運営・実施を行う住民から、次のような話が聞かれた。

「とにかく、自分はみんながここにきて笑って帰ってもらえたらそれでいいと思ってる」

「(マップづくりには参加していないが) マップを見せてもらった。そして孤独死したりしないようにしたい、このままでいいのか? と思った。集落の人が孤独にならないようにしたいと思った」

「自分は生まれてからここでずっと育って生きてきた。1 年しか島の外に出ていない。ここに育てられたようなものだ。自分が小・中学生だった頃、昭和 30 年代は併せて 300 人くらいいた。それが、今はすっかりいなくなった。でもその人たちがここを出ていくときに、何か心に残るものがあり、離れた後思い出せるところにしたいと思った。心の豊かさにつながるように。いかに名音を残していくか。記憶を伝えていくことが大切だと思っている」

「村長が来てくれたり、そういうのは励みになるかもしれないね」

「婦人会、老人会いろいろあるけど、全部組織が大きすぎる。ここの活動は、そういったもの下にあって、下から村に意見を言って変えていく立ち位置でやりたいと思っている」

「ここに来たら誰かがいる。人と人のつながりの場や行く場所ができて、交流が増えた」

④活動の効果 (ソーシャルキャピタルの醸成、強化に伴う地域の変化)

住民への自由回答形式のグループ面接の結果、次のような効果、地域の変化がみられていた。

- ・「今日は来ていない」ということで、安否確認をおこなうなどにつながっている
- ・I ターン高齢者の人と集落の人のつながりができた
- ・新たな居場所、人とのつながりの場として機能するほか、子どもを連れて来た母親が、高齢者に子どもをあやしてもらい一息つくなど、世代間交流の場としても機能している
- ・手助けを必要とする高齢者の生活支援を担うようになり（「ミニシルバー人材センター」）、支え合うしくみが生まれた
- ・生活支援を担う、三味線・方言を教える等、高齢者の役割が生まれた
- ・三味線教室を行ったり、寄合所になっていることで、世代間交流のきっかけともなっている
- ・男性（夫）が生活支援の活動（草刈、剪定、畑作業の手伝い等）を始めたことがきっかけとなり、女性（妻）も活動に参加するようになった（互助の広がり）

（3）あいのこ会（大金久集落）

（写真 8～9 参照）

①集落の概況

大金久集落は大和村のほぼ真ん中に位置し、海岸線に沿って集落の中心は湾を取り囲むように海沿いに広がる。人口 98 人、世帯数は 53 世帯。集落の人口は村の中では少なく、高齢化率は約 50%と他の集落高い。親戚のネットワークが強いが I ターン者が孤立感を持ちやすい。介護サービス依存も加速。趣味活動が少なく、定期的な老人クラブ以外に触れ合える場がない。集落内に

荒地化した畑が増加。

②活動の概要

毎週日曜日 10 時～17 時、県道沿いに建設した平屋建ての「よらわん場」で活動している。他の集落が始めた活動を聞いて、マップづくりに参加しなかった人を含む有志で、「自分たちもやろう」と、寄合の場づくりを開始した。元大工の棟梁が中心メンバーにいたため、建物の設計・建設から行われた。主な活動は、サロン活動（集いの場）の他、高齢者の困りごとへの対応、買い物代行などを行っている。地域産業の活性化と生きがいづくりのために、商品開発を検討している。

③観察記録

16 時頃到着すると、活動の中心メンバーを含む約 15 名が集っていた。到着した時間が遅いので、やはり帰ってしまった人もいようだった。この日はフユルメ（ム）のため、こうしゃ山芋の煮物や豚汁（豚のモツを煮込んだもの）、これから商品化しようとしている塩豚（塩漬けた豚）の入ったもち米の握り飯（カシャ（クマタケラン）の葉で包んだもの）等茶置きとして振る舞われる。費用は参加者が場所代として 50 円払うしくみになっている。食材（農産物）などは持ち込みで、家屋内に炊事場があり、女性たちが話しながら調理している。それぞれが隣同士で話したり、カラオケセットで歌っていたところ、プロの島唄うたいの高齢男性が三線を取り出し弾き始める。高齢女性 3 人が歌い始め、約 1 時間以上続いた。その頃、最高齢の 96 歳の男性は杖をつきながら来て途中で帰っていった。中心メンバーが車で送迎しているようだ。途中、集落出身で現在名瀬市内に住んでいる人たちが 5～6 人、大和村で行われていたグラン

ドゴルフ大会帰りだと言って立ち寄り、にぎやかになる。このサロンができてから、時々集落外に出た人が、たとえばお墓参りの後などに立ち寄る姿がみられるようになったという。96歳の男性のように、「閉じこもりがちの人や、一人でなかなか来られない人は、車で迎えに行っている」という。「そういう人たちこそ来てもらいたい」と中心メンバーの方が話される。

自由回答形式のグループ面接で、運営・実施を行う住民から、次のような話が聞かれた。

「現職だったころは地域とのつながりがなく、集落の人間関係やそれぞれの人のことを知らなかった。退職してから、毎日会うようになり、人間関係の構造などがわかるようになった。そして、いろいろ考えるようになった。人口も減っている。ここで暮らし続けられるためにも、集落の人同士が協力し合えるようになればと思った」

「今までこの集落には集う場所がなかった。高齢化率が50%を超え一人暮らしの高齢者が65歳以上高齢者47世帯中12世帯(平成25年統計)。閉じこもりやつながりがないなどの現状を改善したいと思った」

「昨年はこの建物をつくるために週1回集い、大変だったけれど、ほかには苦労はあまりなかった。迷いは生じなかった。集落の人たち皆と一緒にやりたいという思いが強い」

「文化継承、この集落を守りたいという気持ちがある。消えていくのではないかという危機感を抱いている。その気持ちが支えている」

「この集落には子どもが約15人。この子どもたちのための公園があいのこ会の「よらわん場」の隣にできたら、交流の場になる

と期待している」

「なかなか賛同してくれない人との間にいろいろあるけれど、いつか雪解けが来ると思っている」

「昔から続く集落行事だけは協力してやろうとする。集落行事がなくなるとユイ(結)が消えてしまう。この活動を通して、またユイ(結)が生まれればと思う」

④活動の効果(ソーシャルキャピタルの醸成、強化に伴う地域の変化)

住民への自由回答形式のグループ面接の結果、次のような効果、地域の変化がみられていた。

- ・人と人がつながる場として機能している
- ・高齢者の生活支援を担うようになり(「ミニシルバー人材センター」)、支え合うしくみが生まれた

- ・人と人のつながりや世代間交流の機会を見込み、隣の空き地に子どもの遊べる公園を作る計画が決まった

(4) 結の会(大棚集落)

(写真10～14参照)

①集落の概況

大棚集落は、大和村のほぼ真ん中に位置し、大金久集落に隣接する。大棚集落もまた、海岸線に沿って集落の中心は湾を取り囲むように海沿いに広がる。しかし、人口288人、世帯数155世帯と、村で最も多い。高齢化率は約41%と大和村の平均値より約10%高くなっている。老人クラブ活動や青壮年団・婦人活動も盛んで、集落行事も多く、約100年の歴史のある、集落民が株主となり運営されている共同商店があるなど、結束力の強い集落である。

②活動の概要

毎週月曜・木曜日朝7:30頃から、村の施設「まほろば館」内の加工場で惣菜づくり

を開始し、10:00 頃より集落の商店や村役場にて販売している。集落の、「ちょっとしたおかずを買いたい」というニーズに着目した、マップづくり参加者と有志が要望に応じてメニューを変更し、現在 12~16 品目、作っている。買い物難民の人の支援ニーズに対応し、生活し続けられるようにするために、自動車販売を計画している。主な活動は惣菜づくりだが、最初は民生委員への相談事からニーズを見出し、男性メンバーが「困りごとへの支援」（買い物代行、草刈、台風時の戸締り、釘打ち等）を行うことから活動が始まった。買い物代行サービスを行うなかで、惣菜の注文が多いことに着目し、独自で惣菜を調理し販売することを思き、惣菜づくりが始まった。また、週 1 回午後定例サロンを開催し、体操やお茶会、花見等を行っている。参加者は主に高齢者。気になる人を誘ってお茶のみをしようと言い出したのがきっかけで始まった。

③観察記録

9:30 頃加工場に到着すると、計 10 名（男性 1 名）のメンバーが惣菜を作り、できあがったものを少しずつ車に積み出していた。その後、車で村役場を經由し役場で販売しながら、集落の共同商店に戻ってきて、棚卸しを始めた。商店内の一角にスペースを設け、その日の惣菜が並び始めると、集落の人が来て、買っていく姿がみられた。毎回、完売するという。この日つくった惣菜の数は 14 種類であった。販売スペースには、その日の惣菜についての説明書きや栄養に関する情報が貼りだされていた。惣菜は地元の食材を生かし作られており、体によいものや島の料理が中心となっていた。加工場の片づけ、棚卸しが終わり、全員が集落の共同商店に戻ってきたのは 11:30 頃で、

その後、共同商店の一角の隠れたスペースで、中心メンバーはお茶をしながら今後の予定やそれぞれの近況の話で盛り上がっていた。この日は忘年会の話が中心となった。「こうしてこの仲間とやれるのが楽しい」と話していた。

自由回答形式のグループ面接で、運営・実施を行う住民から、次のような話が聞かれた。

「ずっと大阪で仕事をしてきて、戻ってきた。何かしたいと思った。大阪でいろいろな職業を経験したから、料理ならできるかなと思った」

「おばあ（最年長の女性）から島の料理を教わりたいと思って参加することにした。いろんな人と出会えるようになって、楽しい」

「婦人会や老人会と違い、いろいろな人と出会えるのが楽しい。高齢者の人たちを見て自分も頑張ろうと思える」

「今このメンバーで和気あいあいとやれて楽しい。忙しい人が多いから、メンバーは今は固定化してきているけれど、『今仕事や子育てで忙しいけれど、いつか自分たちも手伝いたい、一緒にやりたい』と思ってもらえるようにと、続けている。ここで暮らし続けられるように、暮らしを守るためにやっている」

「最初は一人暮らしの高齢者だけを想定していたけれどそうではなく、父子家庭の人や、若い共稼ぎ世帯、妻の介護をしている男性などにとっても必要だったことが見えてきた」

「加工場の前にある販売所に、診療所に来た帰りに他の集落の人が買っていく姿も見られるようになった。お店のない集落もあるので、自動車販売も必要だと思うように

なり、今計画している」

④活動の効果（ソーシャルキャピタルの醸成、強化に伴う地域の変化）

住民への自由回答形式のグループ面接の結果、次のような効果、地域の変化がみられていた。

- ・I ターンの人がこの活動を通じて、集落の人とのつながりができた
- ・集落の人たちは遠慮がちで、困りごとを自分から人に頼むのが嫌だったが、「困りごとへの支援」活動により、「ついでにうちも」と声を出す人が見られるようになった
- ・惣菜づくりでは地元の野菜や魚等を利用していることから、集落民が生きがいや楽しみを持つことにつながった
- ・集落外からの人の出入りも増加し、ふれあいの機会が増えたり、情報のやり取りが増えた
- ・助け合いのしくみにより、在宅生活が安定する人が出てきている

4) 保健師へのインタビュー調査結果

これらの住民活動を立ち上げ時から支援を担当している保健師に、主に次の点についてインタビューを行った。

(i) 住民の活動を促すために行政として行ったことや工夫したこと

(ii) 住民の活動が始まり継続・発展していく過程での行政（保健師）の関わり

(iii) 活動の発展、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響したと考えられる要素

インタビューの結果は要点を整理すると、以下のとおりであった。

(i) 住民の活動を促すために行政として行ったことや工夫したこと

「地域支え合いマップづくり」（1 集落 2 回、1 回 1 時間半）を開始したとき、住民の活動がマップづくりの後始まることを意図していたわけではなかった。「地域の現状を知ることが大事だよね、一緒に考えていきたいんだけど」ということで、集落の住民のことをよく知る民生委員さんをお願いして声かけをしてもらい、マップづくりに参加してもらった。行政から福祉計画等のビジョンを示したわけでもなく、お互いどうなるのかわからない状態で行われた。1 回だけの参加の住民もいたが、自動的に「前からそう思ってた」、「こないだまた話し合いをやった」、「こんな地域のニーズがあり、こんなことをできる人がいるからこれやってみよう」などと、活動開始につながっていった。場づくり・きっかけづくりを行ったに過ぎない。

(ii) 住民の活動が始まり継続・発展していく過程での行政（保健師）の関わり

集落の中でも派閥などがあり、賛成しない人もいる。計画段階でつまずきそうになった時に、依頼を受けて活動の目的を代弁し共有できるようにするなどを行った他、一貫して見守りの姿勢を維持してきた。活動に対する反応や効果についてのフィードバックを大事にしている。活動の中心メンバーの中に走りすぎてしまう人がいた場合には、「大丈夫ですか？」などの声かけを行っている。集落間の情報交換、交流会（年 4-5 回）の日程調整を社会福祉協議会が行っているが、行政は見守りを行っている。

(iii) 活動の発展、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響したと考えられる要素

①きっかけとしての「マップづくり」

普段から住民にはアイデアがたくさんあり、「こんな風にしたらいいのに」、「こん

なのがあればいいのに」など常に思うことがある。意見を言って終わりではなく、1歩踏み出し「やってみる」後押しをすることになったのではないかと考えられる。マップづくりは一手段である。

②地域への愛着とコントロール感

ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響する住民主体の活動を継続するモチベーションを維持し高めた要素として、地域への愛着と、やり方を提示されず住民が自分たちで考えて自由にやることができていることが考えられる。最初からなくても活動を行い、人とのつながりが生まれるなかで、地域への愛着が沸いてきた人もいると考えられる。

③住民の気づきの連鎖

活動を始めることで、地域のことや地域の人について、今まで気づかないところに気づくようになっていた。また、「これもない」、「あれもない」、「専門職もない」と思っていたのが、住民が地域の人の方に気づき、「みんな力あるじゃない」と考え活かそうとするようになった。その結果、活動が具体的に動き出し、地域のニーズや地域の方の持つ力に応じて発展・拡大し、人とのつながりが広がっていったのではないかと考えられる。

2. 神奈川県平塚市における調査結果

1) 平塚市の概要

神奈川県平塚市の人口は 257,538 人(105,612 世帯)(平成 26 年 3 月 1 日現在)、高齢化率が平成 26 年 1 月 1 日現在 24.1%(全国平均 23.3%⁴⁾)と、ほぼ全国平均に位置する市である。神奈川県ほぼ中央、相模平野の南部、相模湾に面して位置しており、概ね地区公民館単位に 24 地区に割り

振られている。

2) 平塚市のソーシャルキャピタルを醸成、強化につながる活動の経緯

平塚市では、平成 14 年度に介護予防の推進を図るために、住民参加と協働による活動が開始されることを意図して、毎年 1~3 地区で、6~8 回から成るワークショップを開始した。ワークショップは、平成 14 年当初は地域で民生委員や自治会長等の役職についている人に参加を依頼し行ったが、役職があるため自由な発言ができなかった。そのため、公募に切り替え行った。平成 19 年度からは、住民参加が広がってきたこともあり、介護予防に限定せず、地域住民の健康づくりに活動目的を広げた。現在、ワークショップでは地域の理想の暮らしの姿について具体的に考えるほか、叶えるための条件を考え、どのような活動が可能か考える内容となっている。平成 14~24 年度の間に 12 地区で開催し、平成 26 年 2 月現在このうち 9 地区で住民の活動が立ち上がった。地区により、地域のニーズに合わせた活動へと発展している。

3) 平塚市における住民の活動に関する調査結果

今回、平成 17 年度に活動が立ち上がり、約 8 年間継続・発展している 2 地区の活動と、平成 24 年度に立ち上がった 1 地区の活動を観察し、そのうち 1 地区で、活動を運営する中心メンバーである住民への、自由回答形式のグループ面接を行った。

(1) 旭北介護予防推進会(旭北地区)

①旭北地区の概況

旭北地区は人口 22,212 人、世帯数は 8,785 世帯(平成 26 年 3 月 1 日現在)、高齢化率は 21.06%と、市内でもやや高齢化が進んでいる地域で、平塚市の中心よりや

や西部に位置する。戦後、企業の工場や団地ができるまでほとんど田畑だったところである。そのため、途中転入の住民が多い。平成 22 年度に開設された福祉会館を拠点に、子育て支援や高齢者・障がい者の活動が活発に行われている。

②活動の概要 写真 15～17

旭北介護予防推進会は、平成 17 年 4 月から継続されている住民の活動である。活動は主に、「健康寿命を 2 歳引き上げること」を目標とした週 1 回の健康体操（ダンベル体操・ゴム体操・ストレッチ）、定期的なハイキングやウォーキング、栄養講座などである。会員制とし年会費 1,000 円徴収しているが、会員数は 148 人を超え、毎週の活動には 60～70 代の男女 100～150 人参加しており、参加者は増え続けている。さらに、すべての自治会で民生委員や自治会長、社会福祉協議会などが協力して住民の活動が立ち上がった。毎週～月 3 回程度、体操のほか、ニーズに合わせてサロン活動（集いの場）としての活動、見守りパトロールなどのボランティア活動も行われている。介護予防推進会と自治会単位の活動グループは互いに連携している。

③観察記録

旭北介護予防推進会が開催する週 1 回の健康体操の会場へは、自家用車や自転車で集まってくる。この日、他の地区からの参加もあり、会場となっている公民館体育館の駐車場は満車となっていた。真夏の暑い日にもかかわらず、参加者は会場の入口にあふれていた。男性の参加者数は少なく、通常全体の 10%だという。「女性がいるところは嫌だ」、「自由がいい」、「仲間は欲しくない」という人が多く、ウォーキングへの参加は多いとのことであった。

自由回答形式のグループ面接で、運営・実施を行う住民から、次のような話が聞かれた。

「健康長寿の話聞いて、2 歳引き延ばすことが大事と思った。やらなきゃいけないと思った。それに、家にいてもしょうがないし」

「ワークショップに参加して、このままではいけない、という問題意識から、（活動の立ち上げに）参加しようと思った」

「（他のメンバーが自分に）色々なことを任せてくれて、自由にやらせてくれたのが励みになった。やらなきゃと思った」

「他の地区に比べて、この地区は社協やなんかも皆でさっと集まり団結してできるよさがあるかもしれない」

「楽しいから続けられる。楽しいから一緒にやろうと誘う。楽しかった、という人がいて口コミで広がっていったと思う」

「自分の（A自治会地区）だけは皆と楽しく暮らしたいと思う。まずは自分の小さい村（A自治会地区）から。自分の（A自治会地区）は守ろうかなと思って（自治会地区単位の活動を）始めた。（自治会地区が）変わって来てます」

「体操するとその日はよく眠れるという人もいる。友だちに会え、おしゃべりもでき、体の実感を得られるのが、参加者が増えた要因だと思う。参加者と口をきくようになる。新しいつながりもでき、ついでに得られるものがある」

「自治会の理解を得ようとせずにやっていたら、続かなかったと思う。自治会に理解してもらおうことですごく励みになる」

④活動の効果（ソーシャルキャピタルの醸成、強化に伴う地域の変化）

自由回答形式のグループ面接の結果、次

のような効果、地域の変化がみられていた。

- ・新たな居場所、人とのつながりの場として機能している

- ・参加することで、人とのネットワークが広がった

- ・参加を通じて知り合った住民同士で声を掛け合うようになった

- ・顔見知りが増え、顔を見せなくなった人がどうしているか気に向け、手助けをする関係が生まれている

- ・介護予防推進会の活動がきっかけとなり、地区内 6 つの自治会すべてで、自治会単位の活動が新たに始まった。

- ・自治会単位の活動が立ち上がったことで、車の運転ができない、膝が痛くて遠くに出かけられないなど閉じこもりがちな人も参加できる場所ができ、地域の人とのつながりが生まれている

4) 保健師へのインタビュー調査結果

これらの住民活動は立ち上げ時より保健師が支援してきており、今回立ち上げ時からの状況を把握しており、現在たんとしている保健師に、主に次の点についてインタビューを行った。

(i) 住民の活動を促すために行政として行ったことや工夫したこと

(ii) 住民の活動が始まり継続・発展していく過程での行政（保健師）の関わり

(iii) 活動の発展、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響したと考えられる要素

インタビューの結果は要点を整理すると、以下のとおりであった。

(i) 住民の活動を促すために行政として行ったことや工夫したこと

ワークショップは平塚市健康増進計画の

基本方針「市民との協働を目指した地域の健康づくり」を具現化するための手段として位置付けているが、実際に活動を立ち上げるかどうかは、住民に委ねている。ワークショップはあくまで手段として活用し、「自分たちが目指す地域での健康的な暮らしとはどのようなことがあるか」について共有し、自分たちが暮らしたい地域の姿について、真剣に語り合う機会とした。ワークショップで意見を出し合う過程で、住民が「こんな活動があればいい」、「今はこんなことがやれているけれど、もう少しこういうことができればいい」などビジョンを具体化するところに始まり、「自分たちからできることってなんだろう」という見方に変わり、「こんな活動をしていけばいいんだな」と自分たちの役割が見えていったことで住民が変化していき、活動につながっていった。

(ii) 住民の活動が始まり継続・発展していく過程での行政（保健師）の関わり

必要に応じて住民の要望があれば関わる姿勢で、見守りを続けた。また、様子を見守るなかで、何のための活動が見失いかけているときには、活動の目的、今までの活動や話し合いの結果などを伝えた。活動を市の住民や関係者に P R し、活動に対する反応や効果をフィードバックした。すぐに活動の立ち上げにつながらない場合もあり、そうした場合には 1 年かけて住民が自分たちにできることを見つけられるように見守り、手助けを行っている。

(iii) 活動の発展、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響したと考えられる要素

① きっかけとしてのワークショップ

ワークショップという機会が、日ごろ感じていること、互いに共通している考えを

見出し、「やっぱりそこが大事だよ」と確認し合い整理することができたことで、主体的な話し合いに変化し、活動へとつながったと考えられる。

②活動を行うメンバー間の関係の深まりと、自分たちにできるかもしれないというコントロール感

ワークショップやその後の話し合いの中で、活動の中心となるメンバー同士、互いに自分やメンバーにできる場所が見えて（発見し）、親密性が増し、「できる場所から一緒に悩みながら進めて行けばいいか」という気持ちになっていった。

また、「自分たちにもできることがある」、「自分たちのアイデアで様々なことができ

る」と思え、期待感を持つことができたことや、「健康づくりをテーマとしているが、自分たちの活動は地域づくりの一環であり、地域づくりは時間がかかることなので、焦らずに気長に取り組むことが大切である」と気づいたことで、活動が継続・発展したと考えられる。

③活動に参加した人の変化の実感

参加者同士のつながりが広がったり、参加することによって、生活に張り合いができ、体の調子がよいなどの声を聞くことで、自分たちの活動の意義を感じられることは、活動を立ち上げ運営している住民のモチベーションにつながっていると考えられる。

写真1 大和村の入り口 国直集落



写真2 茨の会



写真3 茨の会（週1回の定例会）



写真4 茨の会（休耕地を開墾）



写真5 ティダの会



写真6 ティダの会（週1回の定例サロン）



写真7 ティダの会（臨時/琉球猪焼き肉会）



写真8 あいのこ会



写真9 あいのこ会（週1回の定例サロン）



写真10 結の会（集落の共同商店）



写真11 結の会（惣菜づくり）



写真 12 結の会（メニュー表示）

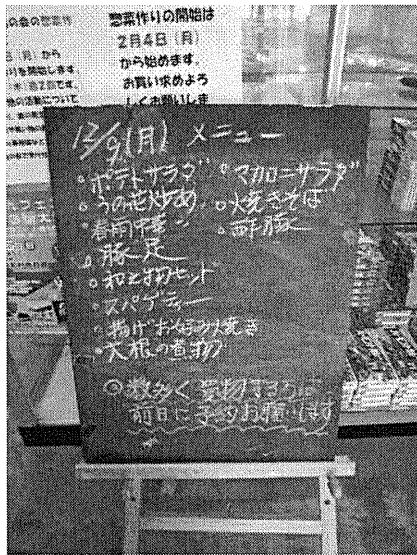


写真 13 結の会（集落の共同商店）



写真 14 結の会（栄養表示）

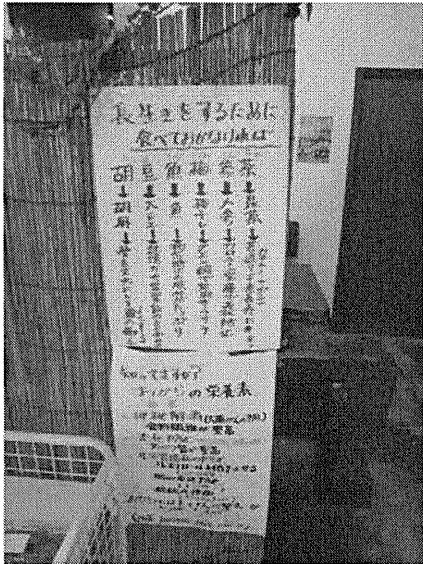


写真 15 くすの木体操（平塚市オリジナルの体操）の様子



写真 16 ゴム体操の様子



写真 17 ウォーキングの様子



D. 考察

1. ソーシャルキャピタルの醸成、強化につながる活動の立ち上げのプロセスに影響した要素

地域の歴史や文化（「ユイ（結）」の有無、産業）や地理的条件、自治体の規模、住民の居住年数、活動を開始したきっかけなどの異なる大和村と平塚市において、活動の運営を中心に担う住民へ行ったグループ面接の結果から、ソーシャルキャピタルの醸成、強化につながる活動の立ち上げのプロセスに影響した要素には、相違点と共通点があると考えられた。

大和村の複数の集落では、活動の運営を中心に担う人びとのなかに、「ユイ（結）」（互酬的行為）の文化が息づいていた過去の記憶が残っており、また地域への愛着と文化継承や集落を残したいなどの思いが見られた。マップづくりをきっかけに、「ユイ（結）」の根付いていた頃のことを思い起こされ、もともと顔見知りであるために集まって話やすく、「ユイ（結）」の文化や地域への愛着を共有できることから、住民活動の立ち上げまでに、複数の集落で時間を要さなかったと考えられた。

一方、平塚市では6～8回のワークショップを約3～6ヶ月かけて行うなかで、住民が顔見知りになり、親密性がつくられていったと考えられた。大和村では2回のマップづくりがきっかけとなり住民活動が立ち上がったのに対し、平塚市では、住民活動の立ち上げまでにワークショップとして一定の回数を要したことは、もともと顔見知りではなく、生まれ育った環境も文化も異なる人びとの関係性を構築するために必要であったことを表しているのではないかと推測された。地域の歴史や自治体の規模の差

が生み出した相違点であると考えられた。

また、認知的ソーシャルキャピタルの指標の1つとされる「地域への愛着」は、平塚市の住民にも見られ、大和村では（地域への愛着が）最初からなくても、人とのつながりが生まれるなかで沸いてきた人もいると考えられていた。従って、地域の歴史や文化、地理的条件、自治体の規模、住民の居住年数などは、「地域への愛着」を高めるために不可欠な要素ではないと推測された。ソーシャルキャピタルの醸成、強化につながる活動の実施・立ち上げにおいて、人とのつながりが広がり、深まることによって、認知的ソーシャルキャピタルである「地域への愛着」が強化されと考えられた。

平塚市で行われたワークショップでは、地域の理想の暮らしの姿について具体的に考えるために、1回費やしている。大和村では、支え合いマップづくりにより、地域の生活の現状を共有することで、参加者に「ユイ（結）」の文化が息づいていた過去の記憶を喚起し、「ユイ（結）」を基盤とする、共通した地域の理想の暮らしの姿を思い起こさせ、行動を後押ししたのではないかと考えられた。従って、「ユイ（結）」の文化が基盤になくとも、政策的に意図することにより、ソーシャルキャピタルの醸成、強化を図り得ると推測された。

2. 認知的・構造的ソーシャルキャピタルの醸成、強化へ負の影響を及ぼす要素

「ユイ（結）」の文化が基盤にあり、同一の集落に顔見知りや親族の多い大和村では、もともと認知的・構造的ソーシャルキャピタルが他の地域に比較して高かった可能性も考えられた。しかし村の人びとが、「ユイ

（結）」の文化が薄れ、人と人のつながりや、互酬的行為の慣習（お互い様の気持ち）、信頼関係などが弱まったと感じていたように、労働形態の変化や公共サービスの充実とともに、大和村でもソーシャルキャピタルが社会経済環境の変化に伴い、減耗したと考えられた。

一方、各集落には「ユイ（結）」の文化が残っていた頃からの名残として、派閥が強くみられるほか、過去に密な関係性のなかで生じた人間関係の確執（しこり）がみられ、一部の住民の理解や協力を得られないなどにつながっている場合もみられた。このことから、「ユイ（結）」の文化は、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に負の影響を及ぼしている可能性や、ソーシャルキャピタルを弱める方向に働いている可能性があると考えられた。労働に関連してつくられ機能してきた組（「ユイワク」）は、この互酬的行為のシステムの安定をはかるために、「制裁システム」を内包していたとも考えられている²⁾。そのため、「ユイワク」のしくみは、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に有効に働いたが、閉じられた互酬的行為のシステムをとおして、特定の「ユイワク」の組のなかで醸成、強化されたソーシャルキャピタルが、集落全体にとっては有害になっていった可能性も考えられた。このことは、住民の特定の「グループ」の人の理解を得られにくいことや、集落での話し合いで、区長等の決定に意見を言えないことなどに表れていると考えられた。

また平塚市でも、地縁が強い地区ほどワークショップが難しく、その理由として、「つながりがあるので新しいつながりの必要性を理解してもらえない」ことと、「地縁が強いとなかなか本音を言えない」ことを

挙げていた。

ソーシャルキャピタルの負の側面については、「別の場面では役に立たなかったり、あるいは有害になったりすることさえある」⁵⁾、「部外者の排除、グループメンバーへの過度の要求、個人の自由の制限、健康行動の下方への標準化のために用いられてしまうことがありうる」⁶⁾との報告がみられるように、調査結果からもソーシャルキャピタルの醸成や強化に影響する地域保健事業や住民の活動の実施（立ち上げ）において、こうしたソーシャルキャピタルの負の側面に配慮しながら行うことが不可欠であると考えられた。

本研究ではその方法について、具体的な示唆は得られなかった。しかし、大和村の集落では、I ターン者やU ターン者が、平塚市でも新しく引っ越してきて地域の人びととのつながりを求めている人が活動に参加し、集落の行事で中心的な役割を担うことで、集落の人と人の信頼、価値観や規範、人間関係やネットワークの構造に変化をもたらしている可能性が見られた。このことから、ソーシャルキャピタルの負の側面は、新たな人の出入りや行政がきっかけをつくることにより住民間の相互作用が起これ、ソーシャルキャピタルが形を変え、再強化される可能性もあると考えられた。こうしたことに着目することで、負の側面に配慮しながら行う方法を検討することができるのではないかと考える。

3. 保健師の視点からみた、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響する地域保健事業・市民活動を実施する（立ち上げる）上で不可欠な要素

大和村のように、一次産業が主で、労働

や生活における「ユイ（結）」の文化が（過去に）息づいていた地域と、平塚市のように、居住者の産業形態が二次産業、三次産業から成り立ち、人の出入りが頻回にある地域とでは、ソーシャルキャピタルの醸成、強化に影響する地域保健事業・市民活動の実施（立ち上げ）で不可欠な要素や手順に違いがあると予測していた。

しかし、大和村と平塚市の保健師へのインタビュー調査の結果、住民の活動を立ち上げる手順に違いがあるが、不可欠と考える要素には類似するものがあると考えられた。具体的には、①住民が知り合い、互いの考えや思い、地域の課題やビジョンを共有する機会（きっかけ）、②自分たちが考えてできることからやっていると考えること（コントロール感）、③活動の中心メンバー間の信頼関係や親密性の構築（地域への愛着形成にもつながる）、④行政の継続的な見守りとフィードバック、であると考えられた。これらの要素を、地域保健事業や市民活動を実施する（立ち上げる）プロセスのなかに、具体的にどのように組み込んでいくかについて、今後より複数の事例を2次調査で分析する必要があると考える。

本研究の調査結果を踏まえて、二次調査におけるインタビューガイド（資料7）を作成した。

E. 結論

ソーシャルキャピタルの醸成、強化を図るための地域保健事業や市民活動の実施（立ち上げ）を行うためには、地域の文化や歴史との関連を無視することはできない。ソーシャルキャピタルの負の側面への対応にも、配慮する必要がある。

しかし、本研究では長期間の滞在や複数

回訪問ができなかったことから、文化や歴史とソーシャルキャピタルの醸成、強化の関係、ソーシャルキャピタルの負の側面への配慮の方法について得られた示唆は、推測に留まった。具体化するためには、フィールドに入り込み参加観察を行い、エスノグラフィーのデータをより深く分析する必要があり、これは今後の研究課題であると考えられた。

謝辞

調査にご協力をいただいた鹿児島県大島郡大和村、神奈川県平塚市、鹿児島県の自治体職員の皆様方、また住民の皆様方に、心より感謝申し上げます。

F. 引用文献

- 1) M.ビルタネン, J.エバスティ, M.キビマキ, J.バーテラ: 第3章学校におけるソーシャル・キャピタル. ソーシャル・キャピタルと健康政策. 日本評論社. 東京. P85 (2013).
- 2) 恩田守雄, 互助社会論, P2-33.
- 3) 恩田守雄, 互助社会論, P352-354.
- 4) 内閣府, 高齢社会白書.
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.html
(2014.3.31).
- 5) I.カワチ, 高尾総司, S.V.スブラマニアン: 第1章序論. ソーシャル・キャピタルと健康政策. 日本評論社. 東京. P10 (2013).
- 6) T.オクサネン, 鈴木越治, 高尾総司, J.バーテラ他: 第2章職場のソーシャル・キャピタルと健康. ソーシャル・キャピタルと健康政策. 日本評論社. 東京. P39 (2013).

G. 研究発表

なし

H. 知的所有権の取得状況

なし